

E-17 「拡大家族の住居観」その3. 男子大学生の同居観
広島工大建築 西川加禰

〔目的〕 前回の報告に引きつゞき、今回は男子大学生の場合をとりあげ、その意識調査の結果報告である。親との同居をどのように考えているか、これからの住居形態のとり方の一つの動向資料とするためのものである。

〔方法〕 対象者は大学2年の男子学生192名であった。質問用紙を配布し、説明をしながら記入してもらい、同時に回収した。調査は昭和46年7月5日に行った。

〔結果〕 出身地域は広島県内55.7%、県外44.3%、親の職業はサラリーマン家庭54.2%、自営39%、その他6.8%であった。住宅は持家か81.2%を占め、両親と祖父母との同居家庭は29.7%で、このうち87.7%は同棟別室型であった。親との同居については賛同型44.8%、雷同型26.1%、逃避型15.1%と、前回行った女子大学生の場合の賛同型20.7%にくらべ積極的に親との同居を望んでいる。又、同居形態についてみると、その61.6%は同棟別室、37.2%が別棟を希望している。これも女子の場合にくらべて、同棟別室型志向が強い。又、生活内容についても食事、団らんなど住生活も一緒にしたいと云うものが圧倒的に多い。次に兄弟の順序との関係を見ると、長男の場合、両親の扶養義務を感じているもの91.4%、しかも同居賛同型は55.1%に対し、その他の同居賛同型は44.4%を占め、長男の同居比率との差が意外少なかったのが特徴である。そして、現在、自分のうちに祖父母と一緒に生活しているものとの関係を見ると同居していない家庭のものほど同居志向は高く、同居しているものは逆に別居への志向性が高い。このことは現実と理想像との間に相当の乖離を含んでいると云えよう。